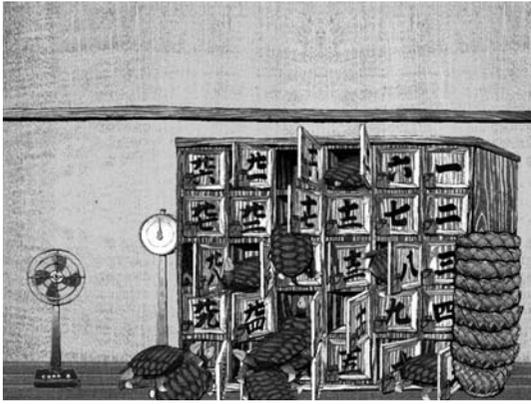


束芋

たばいも
アーティスト

束芋 「FURO」 2006年 ©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

“根本”不在の可能性

@Israel

西 洋のダンスは外から観られる際の美しさを追求したもので、他方、日本の踊りは、内なる美しさを表現するものだと いわれる。バレエなどでは鏡を前に隅々まで目を配り、フォームの美しさを追求していくが、日本舞踊の場合は鏡に映った姿

を確認することは稀なようだ。そこには美に対する根本的な考え方の違いが影響している。その「根本」とは、長い時を経て生じ、統計によって明らかにされ、習慣や伝統として定着するものだとすると、歴史が浅い国では「根本」がまだ存在しないと考えられる。幸運にも私は、その「根本」の不在が、作品作りにおいて大きな可能性になりうることを教えてもらった。

2年前、私はイスラエルのパツ

トシエバ舞踏団と共に作品を作った。舞踏団の振付師、オハッド・ナハリンの「伝統のない国だからこそ自由でいられる」という言葉に、大いに期待が膨らんだ。

私は自分の作品に関する質問には、的確に回答できる自信がある。どこをとつてもその形に至るには理由があり、突き詰めれば歴史の裏付けがある。意識せずとも、少なからず先人の影響がある。それゆえ、厚みのある作品作りが可能になり、理解は深まる。オハッドに出会うまで、この公式はどこにおいても成り立つものだと思っていた。

オハッドは、全く違う環境と過程でモノ作りをする私が、このコラボレーションに対して自信が持てないことを察していた。そして、伝統のある日本でも、また、建国50年そこそこのイスラエルでモノ作りをすることの魅力や、ゆっくりと語ってくれた。その魅力の違いが大きな可能性に通じることを示唆してくれたとき、私の考えは180度

転換し、大きな期待を感じた。結果、『FURO』という作品を共に作っていくことになる。

先日、日本でバットシエバ舞踏団の公演があった。その公演『テロフアーザ』を的確に説明する言葉を私は持ち合わせていない。彼らの体の美しい動きを形容できる単語はまだ生まれてないのではないかと思う。「根本」の不在は表現者を自由にするだけでなく、彼らの魅力の理由を突き止めようとする観客を霧の中へと追いやる。あのとき、各々の観客はいつの間にか霧の中で自分自身に視線を向け、自分の中の何か美しいものに気づき始めたような、そんな面白い状況が少し見えていた気がする。

日本ではまだ未発表の『FURO』は、2006年3月、スウェーデンで上演され、今年5月にはイスラエルで公演される。さまざまな地層の上にこの作品が上陸するとき、どんな新しい美に気づけるのか、楽しみでならない。